

A Study on the History of Rugby Football (7)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23379

ラグビーの歴史について(7)

秦 修司

A Study on the History of Rugby Football (VII)

Shuji HATA

緒言

ラグビーフットボールの起源について調査する際、ラグビー校の校庭にある銘板の言葉¹⁾がその出発点として採り入れられてきた。ラグビーフットボールの起源についての論説が規則的に書かれてきたが、そのほとんどが、1895年、ラグビー校OB会に設置されたラグビーフットボールの起源について調査するための小委員会の報告書によるウィリアム・ウェブ・エリス(William Webb Ellis)について収集した証拠からの選択や引用で満足している。その中で、ボールを持ち運ぶこと(carrying)が1820年と1830年の間の10年に確立されてはいないが導入されていることが明らかにされている²⁾。この事実はボールを持ち運んだ改革者がウェブ・エリスである可能性があるのか又はそうでないのかによるのではなくすべての有用な資料によって裏づけられている。ラグビーとサッカーのフットボールとの単純で最も際立った差は、ラグビーはボールを持ち運ぶことが許されているとする広く受け入れられた前提をとれば、その時、現代のラグビーフットボールはその祖先をラグビー校の校庭で考案されたゲームに求められると言うことが充分可能である。

エリック・ダニング(Eric Dunning)とケネス・シャド(Kenneth Sheard)は彼等の著書、*Barbarians, Gentlemen and Players* (1979)において、ラグビーフットボールについて、民俗ゲームから現代のユニオンとリーグのゲームの形態に至る発達を社会学的観点から研究している。彼等は社会学者であり、ラグビーフットボールについて彼等の20世紀の予想によって歴

史的事実の評価をなしている。彼等はウェブ・エリスの物語を深く根付いた伝統的なゲームがただ一つの行為によって、特にウェブ・エリスがそうであったと言われている地位の低い個人のただ一つの行為で根本的に変り得たというのは社会学的にうなずけないとして棄却した³⁾。彼等はボールを持ち運ぶという行為が偶発的に生じたのではない、何故ならウェブ・エリスは通学生であったので、従って、重要な地位にはなかったからであるとしている。しかし、ラグビー校のOBであるマシュー・ブロクサム(Matthew Bloxam)⁴⁾はエリスについて、エリスは学校では地位が高かった⁵⁾と語っており、彼が級長でなく、しかもラグビー校において地位が高くなったとすれば、彼はボールを持って走るという行為を首尾よくやりとげなかっただろうと指摘するのに苦心しているようである。ウェブ・エリスと同時代の人々が彼のプレーを是認したというどんな示唆も見られなかった。

そこで本研究では、ダニングとシャドの深く根付いた伝統的なゲームがただ1つの行為によって根本的に変り得たというのはうなずけないという観点から、ウェブ・エリス物語について考究した。

本論

ダニングとシャドに言わせると、ただ一つの行為では新しい実践を根づかさせるのに効果的でない。それは正しいが、しかし、同じようにただ一つの行為がウェブ・エリスをそのアンフェアーさで有名にするのに充分であったとい

う可能性もない。規則はしばしば破られてきたし又、破られるものであるが、プレーヤーに悪名を与えるのは、その規則的な不行跡の習慣である。エリスは賢明な生徒であり、当時のラグビー校での地位の昇進は学業能力にまったくよるものであったので、彼がいったん第6学級に進んだら、自動的に級長になった。ダニングとシャドは、1828年、トーマス・アーノルド(Thomas Arnold)がラグビー校々長として着任する以前に、級長は生徒間の事実上自主的な競争によって選ばれていたと考えているようである。彼等の推測は正しかったけれど、事実ではなく、エリスが地位の低い個人であったという彼等の社会学上の論議は、彼が1823年比較的若い年齢で級長になった事実にはほとんど合致しなかった。彼は第6学級でフットボールを3シーズンを完全に行ったので、従って彼がそう望めば規則に違反してボールを持って走り続ける機会が充分あったのである。当時はレフリーが存在せず、彼のボールを持ち運ぶ行為を阻止するものがおらず、阻止するとすればそれは唯一、他の主要なプレーヤーの意見の重みであった。さらに、1822年のラグビー校の反乱⁸⁾に従った彼の同時代の人々の多くの放校又は除籍によって彼の仲間のグループの数が著しく減少したので、それによって彼が遭遇したかもしれないどんな反対も減少した。競技を組織化する際、若干の卒直な規則の概要を述べ、そしてその詳細事項について論議の余地を残す変更の可能性があることが広く知られていた。柔軟性が生ずるのはその時であり、次の50年間ラグビーのゲームの際立った特徴を残した。広く行われている条件に進んで適合することによってゲームが調整され最終的に生残ることが可能であった。その意味において、ダニングとシャドが信じたように、ラグビーのゲームは深く根づいた伝統的なゲームでないばかりか野蛮でなかった。事実、ボールを持ち運ばない(non-carrying)ゲームを行ったプロクサムや他の人々は、ゲームを次の何十年かを特徴づけるものとなったとっ組みあいがほとんどない充分組織化されたゲームとして回想している⁹⁾。

Barbarians, Gentlemen and Playersにおいて、ダニングとシャドはラグビー校の生徒は、ラグビー校の教職員の大多数は単にパブリック・スクールの1つとしてでなく、その一流校として仲間入りすべきだという切望を実現するために彼等のフットボールの構造を故意に変化させるように動機づけられたと提案し続けている⁸⁾。その提案はラグビー校の生徒や卒業生はみずからより古いパブリック・スクールのメンバーより社会的地位が低いと信じていたという前提に基くものである。この前提の証明は、一部はパブリック・スクールの民間伝承に数多くのヴァリエーションで現われる話からなされるが、Barbarians, Gentlemen and Playersにおいてイートン校のクリケットのキャップテンの試合を依頼したラグビー校のキャップテンへの返答として引用されている。「ラグビー、ラグビーとそうですね。どこにあるか考えてみましょう。⁹⁾」諸々のパブリック・スクールの間に対抗意識があったのはもちろんであるし、実際にまだにその対抗意識があると思われるが、この現象はパブリック・スクールに限られたものでなく、通常、多少とも地位の均等な学校の間でも生ずるものである。

ラグビー校はその独自性を主張することによって、ラグビー校の教職員の身分が比較的低いことを改善させたいと切望していたことが示唆されるだけでなく、ラグビー校の生徒や卒業生は社会的に悪影響を及ぼすような属性を捨て、下層階級を思わせるような活動を放棄することを意図したというのがダニングとシャドがラグビー校独特のフットボールの変種をそれに帰する動機であった¹⁰⁾。彼等はH-形状のゴール、楕円形のボール、そして敵陣突破(running in)の実践を、一部には自校に注目を引こうという願望、そして一部には下層階級のやっていたものとは根本的に異なるゲーム形態をつくろうとする試みに、そしてそれは社会的に悪影響を及ぼす下層階級との結びつきがなく、従って紳士のためのゲームとして適切であることに帰している¹¹⁾。

ラグビー校の生徒や卒業生が実際に自校を一

流と認めさせようという社会的大望を心に抱いていたならば、彼等独自のゲームが彼等が極めて切望していた伝統的な地位の高いウィンチマスター、イートン、ウェストミンスター、ハーロー、チャターハウス等、他の学校のゲームとかけ離れて発達するのを認めてきたのは奇妙である。すでに理解されているように19世紀中頃に生残ったポピュラーなフットボールのゲームは、一般的にはキックとボールを持ち運ぶことの両方が許されており、極めて多くのスクラメージがあった。ラグビー校のフットボールのゲームは、どちらかと言うとやむを得ない悪影響を及ぼす下層階級のゲームの方向に進みそれから離れることはなかった。

1845年、ラグビー校においてフットボールのゲームの規則が第6学級によって批准され、成文化されたが、ダニングとシャドは、それをゲームの崩壊の可能性を小さくし、娯楽的競争として始まった試合が本気の喧嘩に変容してしまう可能性を最少にするための必要な手段とみている。腕力に関する規則が1845年により厳重になったというのが彼等の解釈であるが¹²⁾、彼等が比較の基準となるそれ以前の成文化された規則がない。規則は、それが単純に現状を確認し、明確にしたと考えるのが多分に安全であるようなすみやかさと異議のなさで起草された。ゲームが発達するにつれて、作りつけの拘束は合意によって承認された先例に基づいた。ダニングとシャドがラグビー校で行われるフットボールのゲームの最初の規則を想像力豊かに見る際、プレーヤーはボールをコントロールし、押し進めるのに自分の身体しか使ってはならない旨が規定されたのであるが、これは1845年以前にはバットや棍棒が時として使われていることを示唆していると示唆するまではしている¹³⁾。

ダニングとシャドによる Barbarians, Gentlemen and Players は近代のラグビーフットボールの初期の年代についての歴史的説明としてよく引用されるが、それは一連の階級闘争に関しての社会学的解釈をしている研究であることが重要である。社会学的解釈であって歴史ではない。

ラグビー校のトーマス・アーノルド (Thomas Arnold) は、一般的には偉大な改革的な校長であったとして知られている。ダニングとシャドが推測しているように、彼は彼自身が中産階級の出身であるという相反するプレッシャーと彼を校長に任命した既成階級の価値との間に妥協的な立場をとることはなかった。そればかりでなく、彼は精力旺盛で、野心的で、富裕な新興の中産階級の市場の需要に応じていなかった。彼が1828年、ラグビー校の校長に任命された時、既成のパブリック・スクールを首尾よく受け継いだので、その子息たちが生徒の大多数である地方の地主、土地所有の紳士階級、そして聖職者からの着実に増大する土地の便宜を得るようラグビー校は完全に再建された。学問の面ではラグビー校は順調であった。しかし、アーノルドの見解では、道徳の面では順調でなかった。彼はこの道徳な面での改革に着手した。キリスト教徒の価値を日々の生活のすべての側面にあてはめることが可能であるし又、そうすべきであるという強い信念がその動機であり、そして彼は自校の生徒をこれらの価値を広める社会人にして世に出すことが自分の義務であると信じた。

ラグビー校はアーノルドが校長職にある間、そしてその後も他の伝統的なパブリック・スクールよりは富裕な工業の家庭から極めて多くの入学者を引きつけたことは確かである。アーノルドの名声が重要な要因であったが、しかし学校の地理上の位置も又、重要な役割を果たした。1830年代の鉄道建設がラグビー校を有名にした。路線はミッドランド (Midland) やノースランド (Northland) の工場を中心地域と首都をつなぎ、ラグビー校の1マイル以内を通過するように計画され、そして、工場所有者の極めて数多くは彼等の商品を運搬するために建設された鉄道に沿って彼等の子息を汽車で通学可能なパブリック・スクールに送った。彼等が自分自身が子息の社会的地位を高めるようとしたのは確かであるが、これら最初の世代の能力優位主義者たちは一流の教育の価値に抜け目なく、その極めて多くが、子息が社会的に認められた銘

柄のフットボールを行うのを見るよりは、学問的成功を得る機会を与えてくれるパブリック・スクールを選択することに関心があった。彼等の子息のゲームのフィールドでの成功についての関心事は19世紀終り30年までは明らかでない。その時までにはみずからが学校の競争的なチーム・ゲームに参加した親の世代は、その子息のスポーツでの才能に関心を持ち始め、そして、そのようにして近代のアスレティシズム礼賛が進んでいった。アーノルドのラグビー校においてフットボールのゲームは校内行事として残ったが、生徒の親のほとんどはフットボールのゲームがどのようにして行われるかあまり知らなかった。生徒が独立で特別製のスポーツを理想的に彼等の要求に完璧に適合させることが可能であったのは大人の干渉の欠除にあったのは明らかである。フットボールを行うには、芝のフィールド、ゴール、そしてボール以外は複雑な準備は必要がなかった。やがて伝統的なゲームというものを全く持っていない新興の学校の大多数はフットボールを生徒のゲームとしてその持つ素晴らしさについて認識しフットボールを採り入れ彼等独自のものとした。

結

ラグビー校の校庭に銘板が建立されたのは、1895年であり、ダニングとシャドが言うように、元来ラグビー校の生徒が異人種、下等人種と考えていたグループの人々にラグビー校のフットボールのゲームが普及し自分達のゲームに対する脅威がそこに生じたと感じたために作られたと考えられるだろう。

ラグビー校のフットボールのゲームはラグビー校OBの支配から離れ、彼等の価値体系とは反する方向に向きを変え始めていた。ラグビーフットボールの始まりを彼等の母校に明確に位置づけたのは正しかったが、起源伝説であるウェブ・エリス物語にラグビー校OB会の小委員会の報告書で誇り高い地位を与えることによって自分達の結束を固め、強力な異人種の脅威に対抗してラグビーは自分たちのものであると新たためて主張しようと試みたのだと考えるの

が妥当であろう。

注及び引用・参照文献

- 1) O. L. Owen, The History of the Rugby Football Union, Playfair Books Ltd., 1955, p. 15. This stone commemorates the exploit of William Webb Ellis, who, with a fine disregard for the rules of football as played in his time, first took the ball in his arms and ran with it, thus originating the distinctive feature of the Rugby Game, A. D. 1823. (この碑は、1823年当時のフットボールのルールをみごとに無視し、初めてボールを腕にかかえて走り出してラグビーゲーム独特の特徴をつくり出したウィリアム・ウェブ・エリスの功績を記念する。)
- 2) U. A. Titley & Ross Mcwhirter, Centenary History of Rugby Football Union, Redwood Press Ltd. 1970, p. 27. A SUBCOMMITTEE of old Rugbeians was set up in 1895 "to enquire in to the Origin of Rugby Football". It consisted of H. F. Wilson, H. H. Child, A. G. Guillemard, and H. L. Stephen and their main conclusion mere : —
 1. In 1820, the form of football in vogue at Rugby was something approximating more closely to Association than what is known as Rugby Football to-day.
 2. That at some date between 1820-1830 the innovation was introduced of running with the ball.
 3. That this was in all probability done in the late half of 1823 by Mr. W. Webb Ellis, who is credited by Mr. Bloxam with the invention and whose 'unfair practice' were (according to Mr. Harris) the subject of general remark at the time.
- 3) Eric Dunning & Kenneth Sheard, Barbarians, Gentlemen and Players, Martin Robertson & co., 1979, p. 61.
- 4) Matthew Helbeche Bloxam (1805-1888) : ラグビー校OBで歴史家であり、ウェブ・エリスの物語は主として彼の証言に依拠している。
- 5) U. A. Titley & Ross Mcwhirter, op. cit., p. 31.
- 6) 何世代ものパブリック・スクールの生徒達が正式に与えられる自治と権利・特権を求めて行った闘争であった。

-
- 7) U. A. Titley & Ross Mcwhirter, op. cit., p. 29.
 - 8) Ibid., p. 84.
 - 9) Reported in 'Martello Tower', At School and at Sea, London, 1899, p. 25. : quoted in Eric Dunning & Kenneth Sheard, Barbarians, Gentlemen and Players, Martin Robertson & co., 1979. p. 61. (原典：Rugby, Rugby……well, we'll think about it if you can tell me we where it is.)
 - 10) Eric Dunning & Kenneth Sheard, op. cit., p. 85.
 - 11) Eric Dunning & Kenneth Sheard, op. cit., p. 86.
 - 12) Eric Dunning & Kenneth Sheard, op. cit., p. 93.
 - 13) Ibid., p. 92.